

〈巻頭言〉

「破来頓等絵巻」のこと

博物館長・教授 國賀由美子（日本絵画史）

本学の博物館に「破来頓等絵巻」が収蔵されている。日本の古代からの書籍の所蔵先をまとめた岩波書店の『国書総目録』によると、この絵巻には、国の重要文化財に指定される徳川美術館所蔵の14世紀前半に制作されたものをはじめ、国立国会図書館に1種と、東京国立博物館には2種の模本があると掲載される。つまり計4種類の同絵巻とその模本が確認されていることになる。

題名は「破来頓等絵詞」や、主人公の名から「不留房絵詞」とも称され、本学博物館のものには「破来頓々物語」と墨書された題箋が付いている。このよみも「はらいとんとう」なのか、「やれことんとう」なのか、意見が分かれる。謡曲の「破来頓等」は「やれことんとう」とよみ、「やれこ」は「破れ衣」に通じるようである。

内容は、時衆の教義を説くものとされる。4段の詞と3段の絵に分かれ、最後の段は詞のみで絵がない。詞をみると、第1段では穢土に留まらず、「破来頓等」と唱和して、浄土門に踊り入り、南無阿弥陀仏になろう、と誘う。第2段では「不留房」という名の、萬（よろず）のものに留まらずして仏の国に入った者をたたえ、一方で妻子諸財宝に身を縛られ、生死に留まる者の為体（ていたらく）をみよ、と訴えかける。第3段では名号を唱えさえず

れば仏となれる、このほかに仏となることは無いと諭す。最後の第4段でも名号を唱えただけで極楽浄土が出現することを説き、名号のほかに余業はないと結ぶ。

先般来、この絵巻のことが気にかかっている。幸いコロナ災禍が広がる直前に、各館のご厚意で徳川美術館、東京国立博物館、国立国会図書館の順で調査をおこなうことができた。各本の違いや相互関係など、別に頂戴した機会で見聞を述べようと思うが、それについても、この絵巻に関しては不可解な部分が大きく横たわる。

まずは絵の順番である。絵巻物は通常、第1段の絵・詞、第2段の絵・詞と続いてゆくが、他本と比べて本学博物館のものだけ、第1段の絵と第2段の絵の順序が入れ替わっている。伝世中に糊がとれてばらばらになったものを、後世に貼り合わせたときに順番を間違えたのだろうか。

第3段の絵は極楽浄土を現し、蓮華が咲く宝池や七重の宝樹、上空を舞う飛天や瑞鳥、楽器、そして宮殿が描かれる。その前には舟形光背を負う阿弥陀仏と僧が向き合い、踏み割蓮華に乗って散花舞う中を飛行するさまが描かれるが、本学博物館のものには阿弥陀仏と僧の間に、うつつらと「南無阿弥陀仏」の名号が記されているのを確認できる。なぜこんなに薄い墨で、最も大切なはずの名号が書かれているのか。疑問に思っ徳川美術館蔵本の同じ箇所を確認すると、いったん書かれた名号が擦り消されている。さらに徳川本を、目を凝らして周辺を委細に見ると、ほかにも九品を表す9本の蓮華の上や飛天、



「破来頓等絵巻」
(本学博物館蔵)



「破来頓等絵巻」第3段(部分)

(本学博物館蔵)

瑞鳥、楽器のそれぞれ、宮殿にも名号を消した痕跡がある。名号を消すとは何ということか。まさに絵巻に記されることと真逆の後世の行為に驚くばかりで、理解に苦しむ。いったい誰によっていつ頃消されたのだろう。

この不可思議に満ちた「破来頓等絵巻」だが、本学博物館蔵本の存在から、解明の糸口が少しでもみつかることを期待している。

さて、本学のこの絵巻は、昭和46(1971)年度の文部省助成金(私立大学研究設備整備費補助金)による購入資料である。ここからは筆者の想像の域を出ないことだが、この当時は絵巻物研究で著名な梅津次郎先生が本学に奉職されていた時期に当たる。梅津先生は昭和21(1946)年から、当時は恩賜京都博物館と称した京都国立博物館に勤務され、学芸課長として定年退官後、昭和44(1969)年度から同46(1971)年度まで、大谷大学常勤講師として勤務なさっていた(その前後には非常勤講師もされている)。この間、学位論文「絵巻物叢考」を提出、昭和45(1970)年3月に本学は「文学博士」を授与している(大谷大学学術情報リポジトリ)。絵巻物芸術成立と展開の契機を仏教の布教手段としての唱導に求め、これを絵巻物の構成と関係文献の精密な考証によって明らかにした、と評されている。また、中世の絵巻物は芸術的創作を目的とするというよりは、仏教の教理をいかに平易に、視聴覚に訴えて理解させるか、

あるいは仏教への信仰をいかにしてよびさますか、という目的のもとに制作されたが、これに関する新しい研究方法を開いた学術的功績が大きい、とされる。

「破来頓等絵巻」はまさにこの梅津先生の研究領域に当てはまる。また、梅津先生の学位論文の主査は五来重先生、副査は藤島達朗先生と、多屋頼俊先生であった。五来先生は唱導文芸、一遍の踊念仏に論究され、多屋先生は和讃研究の大家で、一遍の『別願和讃』を絶賛された論考が知られる。もしかしたら「破来頓等絵巻」の選定には、梅津先生や、五来、多屋両先生も関わっていたのではないかと、想像を逞しくしてしまう。

梅津先生に指導を受けた研究者に、若くして亡くなられた学習院大学教授千野香織先生がおられる。京都大学で古代中世絵画史を専攻し、京都在住の梅津先生の指導を受けられた。学習院の前に東京国立博物館に勤務されていた頃に、筆者は千野先生と知り合ったが、関わられる美術全集等に、筆者のような地方の学芸員を起用して、発表の機会を与えてくださった。学界の隅々にまで目を投じられる千野先生の姿勢には敬服したものである。

そんな細かい糸ではあるが、筆者も梅津先生に少くは連なっているご縁を有難く感じ、もしかしたら梅津先生も手にされたかもしれないこの絵巻を、嬉々として繙くのである。

*本稿成稿には、山内美智教育研究支援部事務部長、金厚志司書にお世話になりました。ここに記し感謝申し上げます。

なお、成稿後に、本誌第14号に図書館課参事横田恵氏による本絵巻の紹介文があることを知りました。あわせてご参照頂けたら幸いです。